
女は皆そうする！？

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女は皆そうする！？

【Nコード】

N6668K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

モーツァルトのオペラを観た政行は恋人の恵子もそうなのかと思ってしまう。その彼女の返答は。ちょっと駄目な彼氏と無口でしっかり者のヒロインです。

第一章

女は皆そうする!?

コシィファンィトゥッテ。モーツアルトの有名なオペラだ。

これを高校の芸術鑑賞で見た。流石に日本語だがそれでもかなり高尚なことではあった。

「うちの学校ってそんなに金あるのか？」

「こんなの平気でやれるんだからあるんだろ？」

観客席の生徒達の中からこんな声が聞こえてくる。彼等は今市のホールの中にいてそこで舞台を見ているのである。舞台では歌手達が歌っている。

「まあ歌ってる人達はな」

「大学の人達だよな」

「ああ、うちのな」

この学校はエスカレート式で高校の上に大学がある。なお幼稚園や大学院まである。

「そのこの歌劇部の人達だよ」

「その人達の歌か」

その通りであった。

「それでモーツアルトか。ええと、コシガアッテウマイ？」

「コシィファンィトゥッテな」

言葉が訂正された。

「何でも女は皆そうするって意味らしいぞ」

「で、ああして婚約者がいなくなったら何だかんだで相手を取り換えるのか」

「そうらしいな」

「で、女は皆そうするか」

男達はそれを聞いて言うのであった。

「成程な」

「こんなものなんだな」

「女は魔物なんだな」

実によく言われる言葉もここで出て来た。

「そういうことか」

「そうなる」と

こんな話をしているうちにだ。自然に自分達のことにも思いを馳せるのであった。

「まさか俺のも」

「俺のも」

「だよな」

こう話していくのであった。オペラを観ながら。

「そうなるとな」

「油断したら危険だよな」

「そうだな」

そんな話をしていたのだった。そうしてである。その中に一人いた。彼の名は伊藤政行という。

おっとりとした顔をしており目元が特に優しい感じである。一重であるが目の光が優しいのだ。そして黒い髪をやや長くしており黒い眉はそれぞれ少し上に向いている。何処か中性的な顔をしていてそれもかなり印象的である。そんな彼も今オペラを観ているのだった。

「うわあ、何ていうか」

そのオペラを観ながら言う彼であった。

「これって凄い話だよな」

「有り得ないって」

「なあ」

周りではこんな声もあった。

「っていつか展開早過ぎだろ」

「一日でこうなるか？」

「このヒロイン二人どれだけ流され易いんだよ」

こつは言つしかしであつた。こんな風にも言つのは彼等と同じだつた。

「何かよ、こうしたことつてな」

「やっぱりあるよな」

「だよな、これつて」

「なあ」

そんな話をするのであつた。そして政行でもある。それは同じ考えであつた。

「俺もまずいかな」

「つていつか伊藤よ」

「御前の彼女つてあれだつたよな」

「ああ、あれだよ」

言いながら後ろに方をちらりと見る。そこには黒い髪を肩の長さにしていてクールな目をした小柄な女の子がいる。席から見えなくなりそうな程小さい。しかも童顔である。

「あの娘だけだよ」

「清浦恵子ちゃんなあ」

「御前も趣味変わつてるよな」

「変わつてるつて？」

周りからそう言われた政行はまずはその中性的な顔を顰めさせたのだつた。

「そうかな」

「ああ、変わつてる」

「断言できるよ」

「なあ」

周りは言つのであつた。

第二章

「だってよ。何を考えてるかわからないしな」

「そうだよな」

「ポーカーフェイスだしな」

「無口だしな」

彼女の性格である。そうしたことでは有名なのである。

「そんな相手だけれどな」

「まさか清浦もって」

「そう考えてるのか？」

「ひよつとしたら」

実際にその考えを見せる彼であつた。

「やっぱりあるよな、それって」

「まあゼロじゃないよな」

「清浦だって女だしな」

「それを考えたらな」

周りはひそひそと話す。そのオペラを観ながら。

政行でもある。オペラを観ながらだ。あれこれと考えるのであつた。

「ああして結婚式とかになったら」

「だよなあ。これって男はかなりへこむぜ」

「ほら見るよ、お互いに内心かなり怒ってるじゃねえか」

「気持ちわかるな」

オペラの中では男達は信じていた婚約者がそれぞれ何だかんだで他の男になびいてしまっているのを見て怒りを爆発させている。政行も皆もそれを見て言うのであつた。

「これはかなりな」

「やばいよな」

「実際に起こつたらな」

「ああ、そうだよ」

ここでまた言う彼等だった。

「この事態はな」

「我が身になったらな」

「嫌なんてものじゃないぜ」

「あいつもまさか」

こんなことも思う政行だった。

「ひよっとしたら」

只のオペラには思えなかった。そうしてである。彼はオペラを観終わってから何となく浮かない気持ちになってしまったのである。教室に戻る足取りが何処か重い。

その恵子と横に並ぶ。政行の身長は一七〇程度である。とりあえず普通といったところだ。その彼の横にいる恵子は三十センチ近く低い。相当な小柄である。

その恵子である。ぼつりと言ってきたのだ。

「凄い話だった」

「えっ、あれっ!？」

恵子がいきなり言ってきたので驚きの声をあげてしまった。

「今喋った!？」

「喋った」

まさにその通りだと返してきた恵子であった。

「それがどうしたの」

「い、いやさ」

政行は戸惑いながらも彼女の言葉に応える。あれこれ考えているその横でいきなり喋られたのでそのことになんか戸惑っているのがある。

「あのオペラだけれどさ」

「ああしたことはあるから」

政行の心を見透かしている様な今の言葉であった。

「私も気をつける」

「あ、ああ。そうなんだ」

「私は伊藤の彼女だから」

「自覚あるんだ」

「ある」

それはあるというのである。

「だから気をつける」

「そ、そうなんだ」

「けれど」

そして恵子はさらに言ってきたのであった。

「それは伊藤も同じ」

「俺もなんだ」

「そう、気をつける」

こう言ってきたのである。

「いい？」

「あ、ああ」

戸惑いながら答える彼だった。

第三章

「それはさ」

「わかつてるならいい」

それならとは言ってきた。

「けれど」

「けれど!？」

「女は皆そうする」

オペラのタイトルを日本語訳した言葉も出してきたのである。

「男も皆そうする」

「男もなんだ」

「そう。女も男も同じ」

そうだと。表情を変えずに言うのである。

「私それよく知ってる」

「知ってるんだ」

「それ見せてあげる」

そしてこんなことを言ってきたのである。

「今日私の家に来てくれればわかる」

「わかるって。あのさ」

「だから男も皆そうする」

この言葉を再び言ってきたのである。

「それがよくわかる」

「そ、そうなんだ」

戸惑いは消せないままであった。

「それでわかるんだ」

「今日お父さんは出張でお母さんは親戚に家に行ってて帰ってくるのは真夜中」

「ってことは」

「私だけ」

実にあからさまな誘惑の言葉でもあった。実際に恵子は誘ってもきていた。

「どう？」

「家に来てことだね、それって」

「その通り」

やはりそうであつた。

「それでわかるから」

「あのさ、それってつまり」

「沢山言わない」

政行が言つのを先に止めてしまった恵子だつた。

「というか女の子に言わせない」

「あつ、そうだね」

恵子に言われてそれで引込んだ政行だつた。その無口でクールな調子の言葉がかえって威圧感を出しているのであつた。この時点で負けていた。

「それじゃあ今日なんだ」

「そう、今日」

まさに今日だというのである。

「わかつたわね」

「わかつたよ。じゃあ」

「女は皆そうする」

またこの言葉が出て来た。

「それ嘘だから」

「はあ。そうなんだ」

そんな話をしたのであつた。政行はクラスに戻って自分の席であれこれ考えたのであつた。するとそこに皆が来たのであつた。

「おいよ、何だよ」

「喧嘩したか？」

「清浦とよ」

「家に呼ばれた」

そうだというのである。

「物凄いいことになった」

「って御前等まだそこまでいってなかったのか？」

「付き合いだしたの結構前じゃねえか」

「それでもか」

「家に行くのははじめてなんだよ」

そうだったというのである。

「実はさ。それに」

「それに？」

「今度は何なんだよ」

「あのオペラな」

さつき観たそのオペラのこと話に出したのであった。

「そのことも言ってきたしな」

「あれな」

「あのオペラな」

「それが本当かどうかってことらしいんだよ」

それだというのである。

「向こうが言うにな」

「向こうが言うにはか」

「清浦がかよ」

「あいつ何考えてるかわからないところがあるからな」

首を捻りながらの言葉であった。

第四章

「どうにもな」

「ああ、清浦な」

「あいつはかなりな」

「ミステリアスっていうかな」

「何考えてるかわからないからな」

恵子の評価は政行と周囲で大体同じである。実際に彼女は成績優秀でもあるがそれ以上に訳のわからないところがあるのである。

「どうにもな」

「これはな」

「さて、どうする？」

「清浦の家に行くんだろ？」

「ああ、行く」

それはもう決めている彼であつた。既にである。

「それはな」

「まあそうしろ」

「行かないと話がはじまらないからな」

「だよなあ。さて、どうなるのかな」

期待以上に不安が大きかつた。そのうえで恵子の家に向かうのであつた。彼女の家はマンションにあつた。その三階に向かいダークレッドの扉の前でチャイムを鳴らすとであつた。グレーのセーターの上にワンピース状の黒いロングスカートを着た彼女が出て来た。

「いらつしゃい」

「あつ、うん」

「用意できてるから」

こう言う恵子だつた。

「入って」

「それじゃあ」

こうして政行は恵子の家の中に入った。まず案内されたのはリビングだった。木の廊下を進んでそのうえでリビングに入るとだった。恵子はすぐテレビをつけてきた。

「テレビ？」

「DVD」

一言であつた。

「それ観るから」

「DVDなんだ」

「モーツアルトのオペラあるから」

「モーツアルトなんだ」

「そう」

またモーツアルトであつた。学校に続いてである。

「それじゃあ」

「あのオペラだけじゃなかったんだ」

政行はそれを聞いて少し意外な顔になったのだった。

「モーツアルトって」

「モーツアルトは天才」

恵子はDVDのスイッチ等を入れて実際にディスクも入れて動かしてからそのうえで彼の横に座ってきた。二人並んでそれぞれのクッションの上に座っている。

「天才だから」

「他にも作品あるんだ」

「ある」

まさにあるのである。

「これも」

「あれっ、この曲は」

最初にかかったその曲を聴いて言う彼だった。

「聴いたことあるよ、この曲」

「フィガロの結婚」

恵子は静かに言ってきた。

「その序曲」
「あつ、フィガロの結婚つていつたら」
「そう。それもモーツァルトの作品」
「そうだというのである。」
「そうなの」
「そうだったんだ。それにしても」
「どう？」
「いや、これもいい作品だよね」
「音楽と歌と聴きながらの言葉である。」
「とても」
「モーツァルトは天才」
「また言う恵子だった。」
「だから」
「そうなんだ。つていうか」
「つていうか？」
「天才とかそういう理由にならないじゃないかな」
「それを言うのである。」

第五章

「あのさ、女は皆そうするだよね」

「そう」

その話をするのである。

「それがわかるから」

「そうなんだ」

「最後まで観ればわかるから」

言いながらこのオペラを観るように話す。

「それじゃあね」

「うん、じゃあ」

こうして観ながらであった。じつと観ていく。そうして話が進むとであった。

「あれっ!？」

思わず声をあげた政行だった。

「これって」

「ヒロインは裏切らない」

「そうだね、強かだし芯は強いし」

しかもである。

「何かヒロイン側はどっちも。それに」

「男側はどう？」

「伯爵って」

このオペラでかなり重要な人物である。アルマヴィーヴァ伯であるが浮気者であり尚且つかなり諦めの悪い人物なのである。それでいて気品もあり堂々としている。モーツァルトの作品特有であるがキャラクターが非常に魅力的であり光を与えられているのである。

「何か凄い浮気者だし」

「主人公のフィガロも迷う」

「そうだね」

主人公も自暴自棄になってそうした行動を取るのである。

「何か見ていたら」

「そう。女の子は動かない」

「心はだよな」

「それで」

「ああ」

話を観ていくとだった。最後にはだ。

ハッピーエンドであった。女が主導した大団円なのだった。

そこまで観て政行は。静かにこう言った。

「ええと、これも」

「そう」

そして恵子も言ってきた。

「これも女なの」

「そうなんだ。同じ作曲家の作品でこんなに違うんだ」

「あれも女これも女」

恵子の言葉は続く。

「一つの作品だけじゃ言えない」

「そうみたいだね。本当にね」

「他の作品もある」

そして恵子はさらに彼に言ってきたのであった。

「後宮からの逃走。それはどうするの？」

「どうって」

「時間ある？」

それも問うのを忘れない恵子だった。

「あつたら」

「ええと、まあうちの門限ってね」

政行はそれを言われて頭の中でそれをチェックしながら答えた。

「終電までなんだけれど」

「じゃあいける？」

「ええと、どうしようかな」

「わかつたらいいけれど」

譲歩めいた言葉も出して来た。

「それで」

「ええと、それじゃあ」

「他のことでも確かめられるし」

迷いを見せた政行に対して。攻撃を仕掛けた。

「他のことでも」

「他のことって？」

「今、二人きり」

これまで以上にぽつりと言った恵子だった。

「お家の中に二人きり」

「つてことは」

「シャワーもあるから」

語ると頬が赤くなってきた。

「だから」

「つまりは」

「これ以上言わせないで」

今度は顔が真っ赤になっていた。まるで林檎の様である。

「恥ずかしいから」

「じゃあ今からだよね」

「うん」

その真っ赤になったままの顔で答える恵子だった。

第六章

「私はいいから」

「それじゃあ」

こうして政行は恵子自身でそのことを確かめたのであった。そして次の日。皆昨日のオペラの話をもたしていた。彼もそこに来たのである。

「ああ、浅原よ」

「御前はどう思っんだ？」

「俺かい？」

こう登校してきた彼に対して皆で問うてきたのである。

「昨日のオペラな」

「コンナコトナラシナケレバのことだよ」

「コシィファンィトウツテだよ」

一人が間違えてもう一人が突っ込み返す。

「何か間違えやすいタイトルだけだな」

「っていつか覚えにくいぞ」

こんな話の後であった。話が再開された。

「まあとにかくな」

「昨日のあのモーツアルトのオペラな」

「あれどう思っんだ？」

その話をするのであった。

「あれってよ。どうなんだ？」

「女って皆ああなのか？」

「御前はどう思っんだ？」

「そうなんじゃないかな」

まずは微笑んでこう述べた政行だった。

「それはさ」

「おい、そうなのかよ」

「女ってやつぱりそうなのかよ」

「浮気者なのか？」

皆彼の言葉を聞いて焦った様な顔になった。狼狽さえ見せている。

「男はああして振り回されて」

「悲惨な目に遭うのかよ」

「けれどそれだけじゃないよ」

しかしここで政行は笑ってこつとも言うのであった。

「それだけじゃね」

「えっ、それってどうということなんだよ」

「それってよ」

皆彼の今の言葉を聞いて今度は混乱した顔になった。

「それだけじゃないってよ」

「浮気するんじゃないのか？」

「浮気するのは男だって同じだし」

彼はここでは昨日のフィガロの結婚のことを思い出していた。そのうえで皆に対して言っているのである。それはかなりはつきりとした言葉であった。

「それにさ」

「それに？」

「何だよ、それについて」

「女の子の中には一途なものもあるよ」

こつとも言うのである。

「ちやんとね」

「浮気するんじゃないのか？」

「だからコレカラドウナツチマウンダって」

「コシィファンィトウツテだよ。いい加減に覚えろ」

同じ人間が間違えて同じ人間が突っ込みを入れている。どうも人によってはかなり覚えにくいタイトルのオペラであるようである。

「ああ、それでな」

「話を戻してな」

「ああ」

この間違いは置いておかれてまた話されるのであった。

「女は皆そうする」

「そうじゃないのか？」

「だからそれは一面なんだって」

政行はにこにことして皆にこう話すのだった。

「あくまでさ。一面だけなんだって」

「一面だけって」

「じゃあ浮気するのも一途なのも女ってことかよ」

「そうだよ。それは人と時と場合によっても違うしね」

一つだけではないというのである。

「一概には言えないよ」

「そうなのか」

「そんなものか」

「そうだよ。断言はできないよ」

こう達観した様な言葉で答えるのだった。

「中々ね」

「何か随分わかった様なことを言うな」

「？ひょっとして御前」

「昨日だけれどよ」

「まさか」

皆ここで政行のことに築いたのだった。この辺りは中々察しがい
い。

「清浦の家で」

「あいつと」

「それでか？」

「ははは、それはさ」

これまでよりさらに強く笑っての言葉であった。

「まあ内緒ってことでね」

「ちっ、これだから彼女持ちだよ」

「顔だつてつやつやしてるしよ」

「羨ましい奴だぜ」

こう言つてさも羨ましそうに言う面々だった。実際にその言葉には嫉妬が混ざっている。

「まあそういうものなんだな」

「女は皆そうする」

「これって一面でしかないんだな」

皆このことをあらためて確かめるのだった。

「つまりは」

「そういうことか」

「そういうことだよ。男だつて同じだしね」

またこう言う政行だった。

「だからね。そんなに決め付けることはないよ」

「そうか、それだったらな」

「それでな」

こう割り切ることにした男達だった。そしてここで。

政行を後ろから呼ぶ声がした。その声の主は。

「工藤」

「ああ、清浦」

恵子だった。彼は笑顔でその声の方に振り向く。するとそこに彼女が立っている。

「いいかな」

「うん、何かな」

笑顔で彼女の方に向かう。女は皆そうする、されど女は一途でもある、そうした矛盾することがわかった話であった。ささやかであるがかなりの大騒動もこれで終わった。

女は皆そうする！？

完

2
0
1
0
.
1
.
1
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6668k/>

女は皆そうする！？

2010年10月8日15時12分発行